



「女性技術者」に想う

末次 綾



今回このコーナーに書かせて頂くにあたり、仕事のこと、趣味のこと、何を書くか色々迷ったが、ご依頼頂いた1つの理由が「女性技術者」であることだったので、「女性技術者」という言葉について、日ごろ感じていることをつらつらと書かせて頂くことにした。

男女同等、女性の責任・地位向上が社会的課題となっている中、正直に言って、私自身はやはり「男女は違う」と思う。別に女性蔑視ではなく、単に「違う」と思う。

客先でお茶を出していただくとき、女性の私でも、武骨な男性の手ではなく、繊細な女性の手で出していただくと嬉しくなる。これは、女性蔑視だろうか。肉体的な違いがあり、能力的な違いがあり、それが「男女」ではないだろうか。

私は河川やダムの水質調査をメインに仕事をしている。水質調査と言うと、さほど「現場作業」というイメージは無いかもしれないが、実際は、気温が40度を超えることもある炎天下の船の上で、10kg以上の水が入った採水器を持ち上げたり、3Lの水を入れた容器が8本入った、つまり24kg以上のクーラーボックスを運搬したりする、なかなかの「現場作業」である。男性が軽く、ひょいひょいと作業する中、女性である私は同じことをすることが出来ない。小さい採水器を使ったり、クーラーボックスの中身を減らして運んだりしなくてはならず、肉体の差に打ちのめされる。



しかし、女性であるからこそその利点もあると思う。自分で言うのもなんだが、データ処理や報告書等の書類作成は速い方で、お客様の要望に沿った形で報告書にとりまとめるのが好きである（上手かどうかはさて置く）。周りの女性技術者を見渡してみると、資料や報告書は客先の要望を取り入れた、きめ細かで気遣いに溢れた資料であることが多い。女性は昔から家族が暮らしやすいように心配りをしてきたから、相手の要望に応える能力に長けていると聞いたことがある。その説が本当かどうかはともかく、女性の方が気配りがきく、という傾向があるのは確かだと感じる。「サービス業」である建設コンサルタント業の技術者として、「気配り」は大きな利点ではないだろうか。

その一方で、正直、私は「女性技術者」と言われると非常に恐縮してしまう。このコーナーに書かせて頂くのも、非常に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

「女性技術者」として頑張っている、という言葉から一般的に想像されるのは、「子育てや家事と仕事の両立」では無いだろうか。私たち夫婦は残念ながら子供に恵まれなかった。子供を育てる喜びを知ることが出来なかった反面、子育てと仕事を両立させる苦勞を知らない。夜泣きやイヤイヤ期で苦しんだり、残業することで子供に申し訳ない気持ちになる、そんな辛さを知らない。また、夫もよく言えば理解があり、自分のやりたいことをがんばれと応援してくれて、家事を相当手抜きしても文句を言わない。仕事のために家庭を犠牲にしていると悩んだことがほとんどない。つまり、あまり「両立」で苦勞したことが無いのだ。

社会的な地位や責任については、私の所属する会社でも男女差はあるのかもしれない。女性で管理職についている方は少ない。しかし、具体的に女性として軽く扱われたり、男性に虐げられたりして嫌な思いをした記憶がない。

正直なところ、「女性」としての苦勞が少ないのだ。「両立」の大変さ、女性蔑視による苦しみは、想像でしかない。苦勞を語れない私が「女性技術者として」何かを書く事はおこがましいのである。

私は、「女性技術者」という言葉を聞いたとき、「せっかく女性に生まれたのだから、女性の持っている良さ、利点を最大限に活かして技術を生かす」ようになりたいと思う。その反面、「女性としての辛さを味わった経験が少ない」ため、女性として前に出るのは申し訳ないと思う。その反する気持ちが絡まり、複雑な心境になる。これは一生消えないように思う。

「女性技術者」、よく言われる言葉ではあるが、十人十色、経験、苦しみ、つらさ、喜び、みな違う。男性と女性に違いはあると感じる。しかし、一人一人が色々

な想いを、背景を抱えている。力不足ではあるが、そんな想いを受け止めることのできる人間になりたいと思っている。

最後に、全ての男女が違うように書いてしまっているが、そうでない方もたくさんいる。肉体派の女性、気配りのできる男性、男女の相違を超えた方もたくさんいらっしゃるはずである。あくまで傾向として思っていると受け取って頂けるとありがたい。

—すえつぐ あや (株)四電技術コンサルタント 松山支店—

